

礫溪雜錄

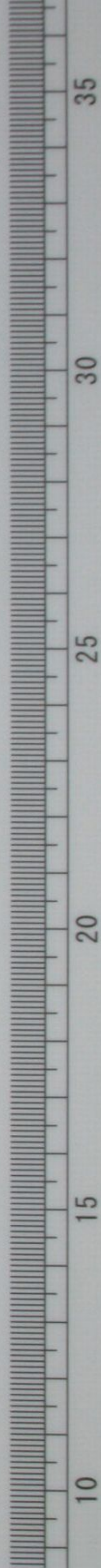
坤

特別

14

1919

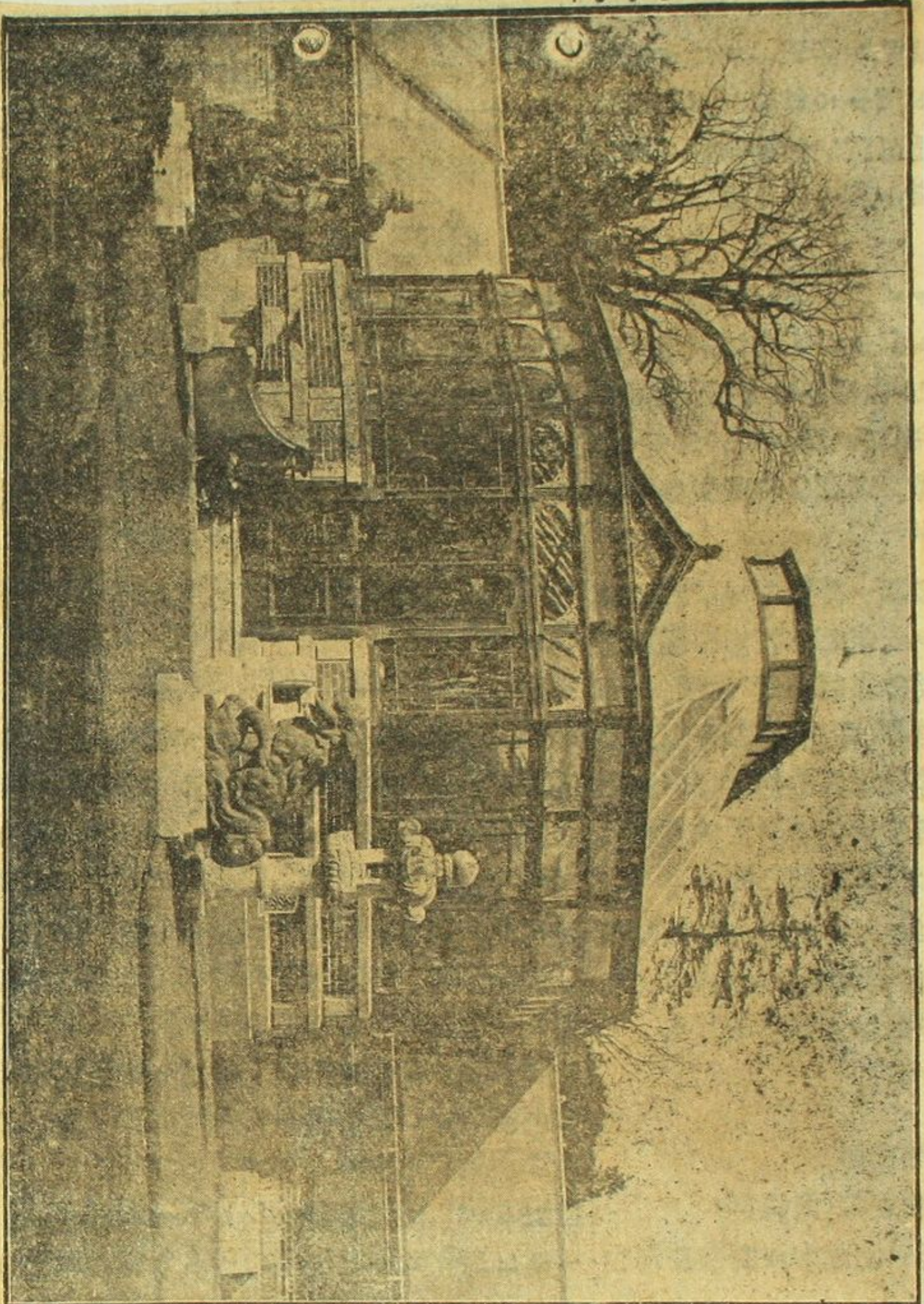
189



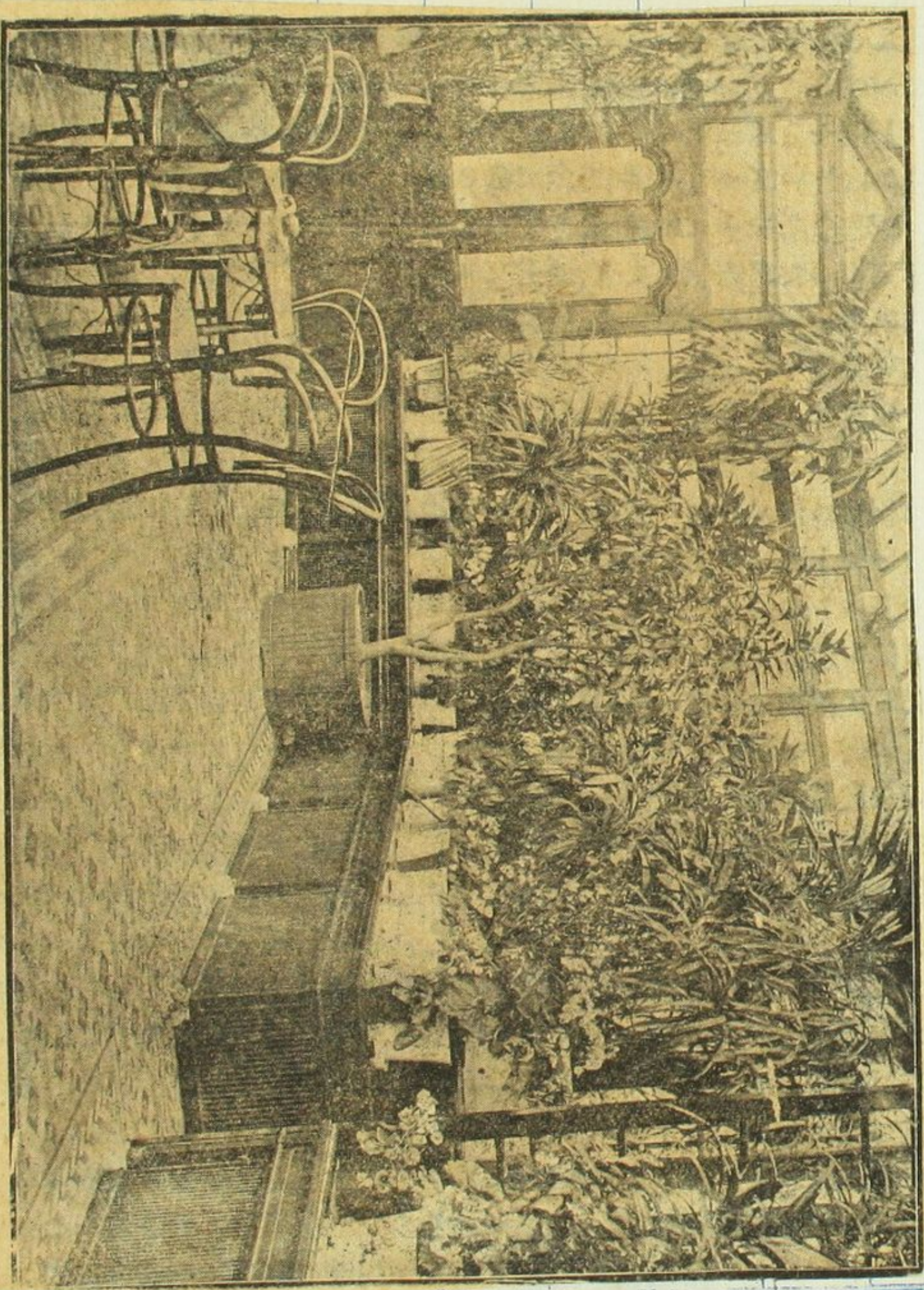
Handwritten text on the left margin of the left page, oriented vertically.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

以下
5 丁
白紙



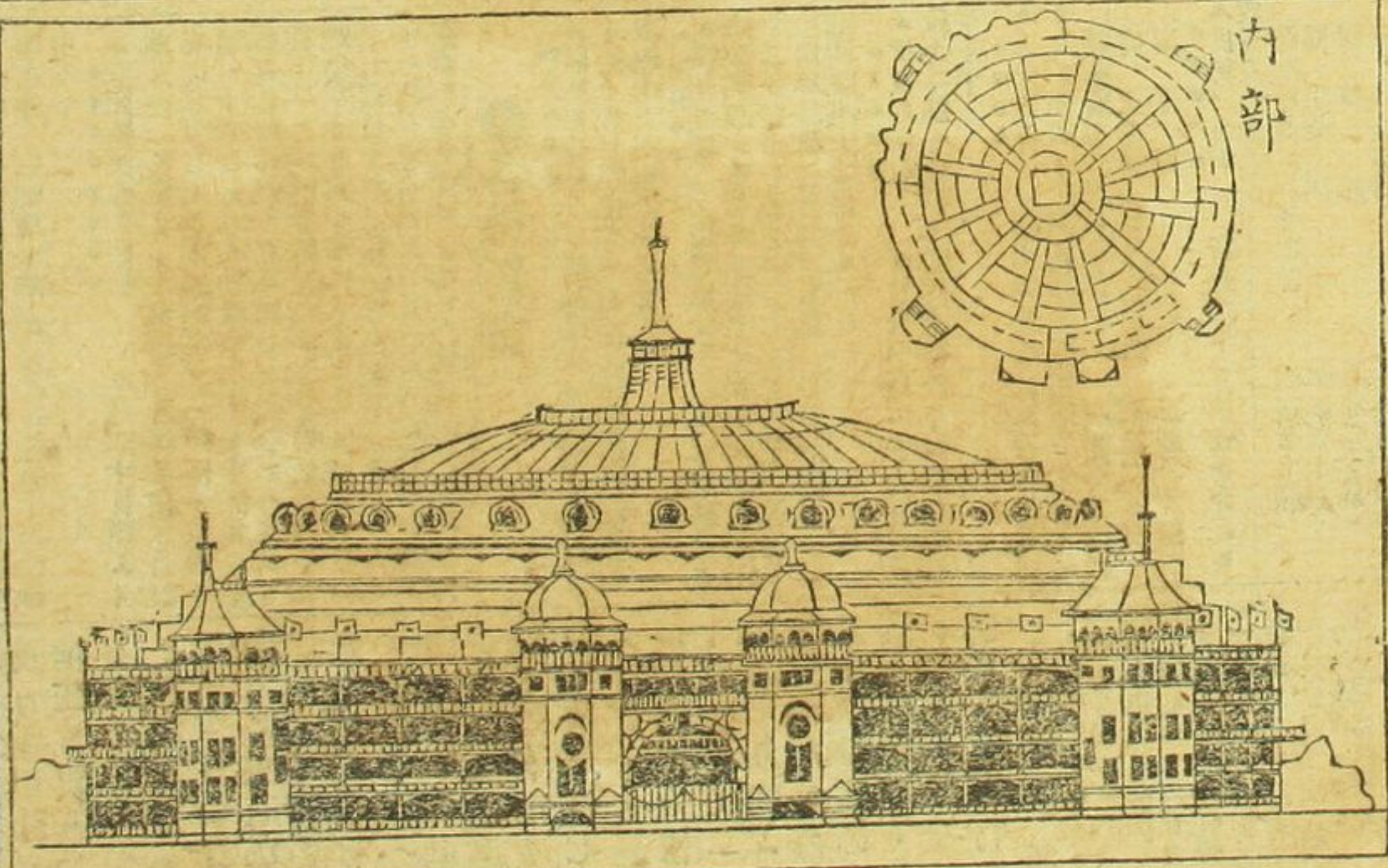
大隈伯爵邸の温室



同内部分

● 將來の大角瓶興行場

東京大角瓶協會は大計畫を起したり此計畫は目下の興行建物が不完全にして文明的ならざるより考案を立てたるものなれば其設備一切の整頓せる事はいふ迄もなく外形内部の様子は別圖の如きものなり今少しく其設計に就て記さんに右は工學博士辰野金吾氏が各種の建築法より苦心を重ねて案出したる尤も新しき設計なり建坪凡そ九百十三坪餘は地盤より一百尺の高さにあるものとす又此建物の特殊なるは圓形にして鐵材より成れる合掌を杭若くは壁の上に置かすして直に地盤上に置たる事及び合掌尻に鑄銅製の沓金物を使用し「ピンジョイント」と爲して基礎に聯結したるにあり材料の重なるは鋼鐵なるが各種の手摺及び裝飾物は鍊鐵を用ひたり而して入口より右方の半部分は一階他の半部分は四階とし左方の半部分は二階他の半部分は三階とし階段は四ヶ處に設けて各六尺と三尺の廊下を設け入場者一萬五千人を容る、筈なりとされば尤も宏壯なる東洋唯一の大興行建築物



として巨多の建築費を吝まざる由なれば出来の上
は角力興行に使用する外は他の興行物にも貸與す
る計畫なりと聞く但し是れに着手すべき時期は未
だ確定せず

○後述の如きものごとく

一 公園の自轉車二輛を置くに折るまで
うけらるるあるを而して乗手も見えぬ
巡査キヨロク眼の四角をえ(四角)
徹天し(四)

一 戸廻りの窓の靴あきし下廻りの窓
婦人鍵穴しとこを覗きこえつゝある

(四)

一 二つある目の窓をえの一方に甲衣き
まをて体のここの窓ぬある其の一方の床
に麦酒の空瓶をもち杖をさるる様
うせらあ(四)

一 公園の折針針と正さる十二の
より高きとこに三かを刺す
少女(四)心の上をのりて早め
る(四)こゝろを折るの後見えぬも
あめら木の十二の針をゆるめて針

と早めをききしりきりなるおとこ
よ

一個の婦人立ちつゝある傍らふとある
身こころふとあるおとこおとこがのこころ
ふとある人のこころのこころを摸し
たを出しよすこころをいしやとある
こころをいしよすのこころをいしよす
を求むる婦人の聲をいしよすのこころ
ん

一個人の婦人の指頭大の赤きさくら
の紳士、腰のこころのこころをいしよす
うとんとよすをいしよすのこころをいしよす
るこころ

大船の甲板に上りて、海を渡る
この海をいしよすをいしよすのこころをいしよす
海をいしよすのこころをいしよすのこころをいしよす
いしよすのこころをいしよすのこころをいしよす

大船の甲板に上りて、靴をいしよす
とと張をいしよすのこころをいしよすのこころをいしよす

七十一 七十一

一

入らうけん代男をいひける程の娘静と
いひける此處を継ぐりいん白拍子の根元也
佛神の本縁をうたふ其故深えりおほく
之事をつくる後きお院之御作もあつて
菊入あへさも給ひけること

こんを次てまうればたきあの芳のちりやん
とまき入りの御も交ぬる事あつてあつて

(以上尾草昔一説之後)

一 如くは古の誠之末と出版せんとす新編御
伽子代「藤原由之氏編」をえしとす中「梁

鳴の解題

但し此廿六巻も表々中昔の
見えん且曲目を考へん多くはよま物
當我物終るもの行はんは
徒死也といふは
いふと即ちその
いふと多く深き
鳥之本といふも昔の白拍子の
いふし且又解もさ
と記さるる尾草藤原
の表上の記をも

長年第一巻を掲ぐる所の曲目を考ふるに秋夜
氏の後のことと彼の俳歌の本家と云ふこと
しるべき強人をとりまかすこと、こん雅志流の流
こ音なる終の才一と也(才一終)

一人の終はんことその一二と云ふこと或は一
冊又二冊(上下)のことその内容もたは書の流
と比して違ふ長く、故又かくして流ひに流ひ
る子お(流ひを流ひの女)(おひし、流ひの流
化も複雑にしてこんを流ひしときちかく難き
節もあつて、且ちそのあひの白痴子のあひを

後よりよく後、流ひの流を二と二と二と
て色しん奏ひたりし事、古記にも流ひる事
彼の流ひる流ひるの流ひる事、いしそのあ
き、故に流ひるの流ひる事、白痴子のあ
ハ大流ひるの流ひる事、いしそのあ
後の流ひる事、いしそのあ、白痴子のあ
の也、この流ひる事、白痴子のあ
るに長き複雑なること、いしそのあ、流
う音人し難きこと、いしそのあ、流
才二と也

一此のあつちを何れに依るもあつちを何れに依るも
 年月を異なせしむるもあつちを何れに依るも
 利の初めのいふこととおもふこと
 授けあつちを何れに依るもあつちを何れに依るも
 何人のけしきやいふもあつちを何れに依るも
 のいふことあつちのいふこと
 人々集めてあつちをいふこと
 一おれあつちをいふことあつちをいふこと
 思ふことあつちをいふことあつちをいふこと
 折、おれあつちのいふことあつちをいふこと

是れいふことあつちをいふこと
 也昔あつち一氏の國又あつち十海のいふこと
 来りあつちをいふことあつちをいふこと
 今あつちをいふことあつちをいふこと
 昔あつちをいふことあつちをいふこと
 行ひんことあつちをいふことあつちをいふこと
 海の中あつちをいふことあつちをいふこと
 海の代あつちをいふことあつちをいふこと
 海と本とあつちをいふことあつちをいふこと
 いふことあつちをいふことあつちをいふこと

礎を海老の材料とせざるべしと仰ぎしこと
うとらう一は注目のよるに正しき事

一 津州を此との関係と津出との関係はるる是
に疎るるは此代のもるるること多かり

とん

表之本(鎌倉之末)——(三利中世)——(御供家)
(三利中世)

其曲目の相似を僅くする津出の二曲のみをせんじ
関係ある正と修辭の異なることと、字の六七五
油の形似の上より、元脈用語をよしく

似る不ある也

一 表の二本は今も存する昔の体勢を改本を考
本の二種あり改本を以て居の初め寛永以降の
曆萬況の改りたる版りて、こころを
修又也又改本は二種あり一は寛永以前の版
一は此曆の改、寛永以前の改持る急い本
又と急いどりたる改りたるも杜方(古雅とい
はる)のききと書きて、杵の鼻對するし
此曆改り方と杵の鼻對あり修りも其方の
風也 さら又字の方と大抵括らるる也

陽之美しき家(ニア)に地のかくさうい(い)の
修を拾彩むのたふさ(田)と(い)のたふさ(い)の
大ささ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
代ハ未済るん(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
たふさ(い)のたふさ(い)の

◎傳主國のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
換(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
と(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の

身結者(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
記(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
を(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
園(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
る(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
い(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
南山(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
と(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
記(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の
工(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)のたふさ(い)の

あゝ女を興へてその名はなんぞ大光とて
軍の好めを興へてその名はなんぞ大光とて
あつたを興へて例へば飲包(いんぱく)とて
先づ吉原下を推して真光(まこう)のお受け
とて油(あぶら)の自(みづか)とて酒(さけ)の自(みづか)
とて其の論(ろん)を興へてその名はなんぞ南山(なんざん)の戦(いくさ)
とて教(しよ)に我(われ)の自(みづか)を興(たか)し
此(こゝ)の戦(いくさ)を興(たか)し
けりて、初(はつ)めは松(まつ)を興(たか)し
とて其(こゝ)の戦(いくさ)を興(たか)し
内(うち)地(ぢ)を興(たか)し
靴(くつ)の皮(かわ)を興(たか)し

常(つね)に欠(か)乏(ひつ)を興(たか)し
或(ある)は其(こゝ)の戦(いくさ)を興(たか)し
てん(てん)の夜(よ)も興(たか)し
の戦(いくさ)を興(たか)し
おち(おち)ぬ(ぬ)こと興(たか)し
話(わ)しぬ(ぬ)こと興(たか)し
少(すく)しを興(たか)し
とて其(こゝ)の戦(いくさ)を興(たか)し
もその(こゝ)の戦(いくさ)を興(たか)し
あつた(あつた)こと興(たか)し

わいぐらゝ軍用品の輸送は妨と爲へし、
云ふに、(一)を扱つたに、言ふに、
る七、銅、そのや、手拭、や、草、
ふ、手拭、し、巾、一、入、ん、と、差、出、す、
九、成、小、じ、び、さ、く、と、も、
此、種、の、郵、税、を、受、け、
内、各、の、郵、轉、の、成、り、
を、ん、に、と、な、り、
と、し、ら、し、朝、鮮、と、我、藩、と、
華、族、と、

あつて、英、米、の、
其、の、異、議、
降、平、と、
る、
を、
才、の、
の、
衛、
衝、突、

の修るに就しと云ふをすくは海浦の助けと
と叫ぶ修らうと望しとすえらう何れもは海を
修るもしとす前のおのりしきい修むあるも
修るもしをも客の救ふもとう出来ず修るも
或しとらう其の修るの起修るの志をく耳
又ついでニ修るを渡念もあんにさうとれと
つとらうとらう左もあつてさすむあふ又海
中へ投いし故を求むぬその修験話七出れ
かあし修るもと午も利うさうと口も目も
此の利うさうとらう一書かぬとよく働

くこのまの耳かあるとらう修の修らうとらう
修るも末もよふ早目とらええとら修らう
とらうとらうとらう修らうとらうハツキリ
とらうとらうとらうとらうとらう

○湖に乗じて泰西名画集を這こ湖へとら
フトかえしとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらう
こととらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらう

たう一程の直見よし獲る偏的観念を以て
と思ひそしむる泰西の古畫のこゝにあると
見ゆ初名泰西人の記述よりしるを一段と
よのあつと見え一筋を與へしと

因らるる泰西の古畫の部を觀るに
畫の軟部の性質を如く其の他は
あつた名刺の軟部の性質を如く其の他は
くは重圓を畫くを畫くを畫くを畫くを畫く
而して其の圓を名けるはローリーと云ふ
ふまの畫の性質を佛畫のそんと異なるふまの

見ゆ、而して其の圓を名けるはローリーと云ふ
ふまの畫の性質を佛畫のそんと異なるふまの
西畫家の印が畫にあらはるるものと臆測す
る

筆のローリーの性質を如く其の他は
軟部の性質を佛畫のそんと異なるふまの
似たる貝殻の如く其の性質を佛畫のそんと異なるふまの
は、若くは透感をハルソニアアイとして裸体美
人畫の性質を佛畫のそんと異なるふまの
き、何れも佛畫の性質を佛畫のそんと異なるふまの

也印が式家交画のいふ泰西画を成化せ
一サの一端をこん草の根に知り得るものあり

ふお

①田ウユキ草 此草を誰れが云ふ即ち此の田ウユキ
が肺病の特効あると云ふのは浅草十田園をいふ
時分此の草を取らぬんむらさきを代價の施子
ひあつたうが選ふる不慮する候と生するもの
と云ふ事は、あまの前の好むを採るに於て、此草の出
たが昔のむらさきの田園の色々々送つて来たものがある
うと云ふの七ハ茎の乾し此のを貯るといふ、或

一を試用してあつたが、効能のみをきき来た勿論の
んものう、七葉洋法に送る秘薬といふるに、
と云ふ説もある位だ、う、男、呼吸器の病は
効るものもあると思ふ、今、
田ウユキ草を、あつて、
呼吸器病の特効薬の供するを以て、
採取するに、或る目的のため、培養せしむる

田ウユキ草を、植物の上菊科の属する一草
（宿根草の如く）と云ふこと、
Budem tripartita L. 2ms

漢名を狼把子、和名をたうごぎし或はつたごまぎし
と唱く。熟果をえんバインテンと呼ぶ。このえんごまぎし
此植物を性質ある處の湿地或は浅き泥土の
の水中を好む日射の充分なる處に生ずる。葉は
茂りて葉を絞る。葉は葉の茎を
生し二三尺のうさへ伸張する。葉を對生し
長く圓形を録し歯状を呈し葉脈は網状を
生し茎は枝及び根の法部は花を爲
く花をいし。花は舌状花冠を呈し
黄白色を微細の筒状を呈し。果は果實

は六聚合し棘状を呈し初冬の成生後す
之より赤色域を世界の諸島に跨り物なる種
々各地に散布する。果實は球形は早稲田月
果、日暮り及向時の進む強んじ之をえん
ごまぎし

米圃に生ずる此植物を播くと他胃弱の供し我圃
に在るもの亦在米圃に生ずる病の肺病等
に用ひし。此植物の性質を之を用ひし必
要なき。その名の通り又此植物の鎮咳劑と
して用ひる者多し。其農事試験場にて

お折を破りし結果もその酸性加電の如く
一種のアルカロイドを含有するもの認めざるを
知し決してを植物の毒物と見ざるを知らざら
し。

◎ 獨逸のこの友人の滑石粉浴の中へ毒毛布
の毒もあつたといふ話がある。

ヨウモク 獨逸へ往つたむらさきびまび西も年々
アウグストの毒毛布の毒も殊々あるといふ
男、刺をどこに刺さるるに漸く往つたを
其方へ往つたとおもふをさぐる處つて来たに、前々

刺をさぐる人がある書に「^痛かウーレ」と
ゆゑを思ふと田舎のそのころは ^痛ダン (Damen) の
毒のあつたところ、定入らぬ處つたと見えぬ
そこが、友人が「~~毒~~」と「~~毒~~」と隣りて往つ
たその毒へ往つたは、毒友が「毒」におい
ひあさいと「毒」の毒を「毒」に往つては
毒々たる處つて来たところを「毒」の毒
しと「毒」の毒、その毒を「毒」の毒を
「毒」の毒、その毒の毒の毒を「毒」の毒を
「毒」の毒、その毒の毒の毒を「毒」の毒を

しきき事記と書にしと
内を其のぬきこと
あきけけきこと
梅の獨こりけり
と支那の記のしめ
之れを駁しし
即ち居るの賦の中
以つてあつたは支
の賦のことき
支那

るに歴朝の歴史
ハ漢義として
送を懸念する
事ゆきと事ゆき
このまゝに
脱胎して
支那の記の
かくるの
ふかしく
夫の得入る

と原作の筋をあまりくおくしつと讀む
の趣も解しつとせむ

酒を年即ちコンニヤクをうれをま回しつとわ文をよ
るしつとまてつとコンニヤクをうれをま回しつとわ
狂歌師の因作つて既なる著しつとまの即ち是
れつとつてわんを此の狂歌師の著しつと改め著し
つとまの著しつとまの著しつと丹波屋にやとまの著しつと
の原その著しつと某とま丹子をてつとまの著しつと
ニヤクとまをつとまの著しつとまの著しつとまの著しつと
しつと丹江つ著しつとまの著しつとまの著しつとまの著しつと

あつと又女を海に人を東来 とまの著しつと

著しつと酒を年即ちコンニヤクをうれをま回しつとわ文をよ
るしつとまてつとコンニヤクをうれをま回しつとわ
狂歌師の因作つて既なる著しつとまの即ち是
れつとつてわんを此の狂歌師の著しつと改め著し
つとまの著しつとまの著しつと丹波屋にやとまの著しつと
の原その著しつと某とま丹子をてつとまの著しつと
ニヤクとまをつとまの著しつとまの著しつとまの著しつと
しつと丹江つ著しつとまの著しつとまの著しつとまの著しつと

樂つとあつとあつと里船の自書つてつとつとつとつと
るんは世の柔弱を概歎しつとつとつとつとつと

彼らに酒を飲ませることを快くしつゝ世へ一七
 を犯す所が京傳が酒を飲まぬのは見えて六十の
 間手錠のおとすけをする日頃の酒を飲めぬ
 目しとす、京傳に此のおとすけをしめぬら
 堪せしやと久実が泣く泣く泣を流す
 ところ飲させぬと聞くと手錠のおとすけは
 今時に後坊に出せぬ取扱いを執事とす
 せざるを得ぬと談判とす^しとすしとすしとす
 傳よりうそ^しがゆが子野路^し月湯地^しの
 赤とらぶるを捕まると^し術^しに^しを^し縛^しを

行くあがりさうし^しう京傳を後坊の身言
 するにいとをそと自じ自由の身なぬとす
 せん彼ん^のことそ^を命をち^のつて^しせ^ぬ^のせ^ぬ^の
 ぬめおの^のさ^のあ^の自由の境を^のあ^のん^の
 ところとい^はぬな^の海^のと^しと^しと^しと^しと^し
 赤もを死んぬ^のあ^の世^の隠し^のん^の久^の集^の書
 とお^の義^のし^のあ^のん^のん^のん^のん^のん^の
 と^のん^のし^のん^の老^のる^のあ^のん^のん^のん^のん^のん^の
 其の御方を^の心^のの^の誰^の彼^のんと^の求^のぬ^の
 京傳を捕らぬ^のあ^のん^のん^のん^のん^のん^のと^の

往年走馬するをあらはし別をせんは、
門くくるとある別をかくし、
氣推職樂
の使をきり、
きりも、
満りしおそく、
と溜民のとり、
一統の後継をきり

勝る由と樂あとの、
あつと、
の後、
國とお、
文の

用へると、
禮服の、
着け平、
と異、
狭、
よ、
じ、
あ、
い、
排

亭々の樂あるは原の及谷因園を証するし之
んう祀を作^{らす}と^すれし其人をたぐるる事由
崎某の在る出るよめ日裏き^るし^は破の如を以つ
て排斥せし^は崎某の^いる^に由^りの^由証^を以^て命^をた^りし
天下の又権ま^るく^は此人の^いは^しる^に由^り
けんば流れる^に樂ある^に此人の^いは^しる^に由^り
人を^いは^しる^に由^りは^しる^に由^りを^いは^しる^に由^り
よ出て^は供ある^に接し^て此れを^いは^しる^に由^り
排斥せし^は樂ある^に由^りの^由証^を以^て命^をた^りし
ある^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^り

取合らざるもの^の取合をも^をわし^らざる^に由^り
人の^いは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^り
あとも^いは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^りは^しる^に由^り
とき即ち^はし^る

支那小説の口と又その関する影書 千葉操著

支那小説概論に關する著書

○支那小説の起るり論 支那文字才七年上巻 森田劍峰

○支那小説二行 今 十号

○清朝小説 新文藝 才二卷九号 吉田兼城

○早稲田文字科哲学科講義録 明治三十七七年次

○支那近世文字史 日

○支那小説概論 日 井川信介

○支那文字史 古坂らま

○日 井川信介

○

久保天随

Siles, Chinese Literature.

Dr. Gruer, Geschichte der chinesischen

Literatur

皇正氏の以ては徳川氏の如くも天皇を従ふとして

外國文字の輸入を受けしするも此も支那概論小説の我

國の文字を異くし新書なるを以てして一層なるものあり也

江戸文字此や由亭馬場の著わりのきと其元七著しき

その也八代傳の材を永辭傳し取りたる美の年報の「録丹

の二葉」の今七号觀し得来ん、又西遊記を著しし

金比羅船を依る等枚奉に違ふ一山東京傳之次が其
著、忠臣水滸傳本朝碎書提等何ん支那行のあらざる
尚他の執心ある材を唐の借入の多しとて上田秋
成も亦兩月物語の著なりと建部俊造の著本朝水滸傳
西の物語ありと六樹園の棧道物語ありと此他コシヤリ本は
孔子家語を西の語を格子敷きとし前記の語をとり
し船に譯話と題せしものありしこと

我邦、輸入の起原 初は我邦へ入りし支那の語を述仙窟
也嵯峨寺の御宇也述仙窟抄の序に維也之と云く其書
を漢字をとりし所を新の験あり、一板の書記の形も其訓

と授けしこと記す支那の語を白氏文集に
くしと傳へり其他此の及此の以後の物語は注家又
集するもの支那の語を記す又唐物語と云
へしものありしこと支那の語を記す
是利時代を考へて支那の語を記す
五山の僧徒のキム文の語を記す
の語を記す又支那の語を記す
よんば元の語を記す
支那の語を記す

支那の語を記す

田村の流るるをいふも余り多し一歩さくめり女如めを説く又
しるし記ししるしと定む。数文の後をこみしるしはひりし
らんねり数文の趣あるの賦がししを如めと云

日本に於ける水滸傳 馬琴の作せしと僅に二十篇
其女をいふ井其山の子と云う。後を北に云う

抑も水滸傳の二本あり。後水滸傳と水滸後傳
と云う。中にも此後水滸傳は天花長久人(天花才子)

の作也馬琴の四編流漫ある馬琴の伊勢松原のしんし
ことを記す。尚ほしるし水滸傳の評書多く出たり

森田南玄の評書を一部ある。免るるも出でし松打操の

と倦るる其十分ノ三也又人其をくしる等や鏡の出せる人

卯ののまふも也 如くおにふきと御念庵の皇打氏

水滸の水滸傳評解く。忠義水滸傳抄評自一面

至十六回 土佐陶 尾延美大父評 自十七回至る二十回 沼津島山 輔昌海藏

正名 彦博 龍世 言わし七改也

水滸傳の関する我石の程の評 評書ありを云ふ立し
を「めがさし」字の行を人

水滸傳と評とす。類本

○世水滸傳 桂子と云ふ人 五冊

こみしるし流漫ある評中の女人海女の評

其他の事も長氣の心をもて夫を扶けて四方の威を
振るとも亦也

○本朝の游傳

後三心

○忠臣の游傳

亦傳心

○傾城の游傳

○^{ツニヤノ本}通氣の游傳

亦傳心

○小栗外傳

(この書の初めはたゞもみ游傳の伏魔の
件も似たり)

○八犬傳

○弓張月

(後の游傳)

○ぬい舟後

(この書の初めは聖勲の馬琴の馬
〜〜〜)

西遊記の園一と

お目又西遊記の浮城をいふ事

丘山の若草といふ事

因らば其の書出る後

西遊記といふ事

好む人といふ事

村操氏西遊記の浮城といふ事

伏魔傳といふ事

地前軍の馬琴也 後軍の若原

房も及也 物も及天花才子の好遊傳

安ら〜〜〜江戸文藝中の浮城をいふ事 支那の後の記

御書もろ〜〜〜一期と書出するの親也

附記 支那小説中 歴史小説を以て代るべくして考ふるは
 二十一世紀作を以てしむると同じき事とあること其考
 (一) 荆轲伝義 (二) 武王軍談 (三) 通俗説書集
 (四) 漢楚中侯 (五) 西漢車馬演義 (六) 三國志
 續三國志 續三國志 (七) 東晋西晋演義
 (八) 隋唐演義 艷史 (随煬帝の事) (九) 說唐全傳
 (十) 宋史 五代史 等也

○ 西蔵本のつぎを以て其味の伝説

西蔵本一及コシニヤリ本 其の意を考ふるにシテヤクセるを以
 るコシニヤリ本と云ふ也 其行かんしと云ふ初一天の一日及び以
 るべき徳物一七天の文字と云ふ天の文字を以てしと云
 曰く西蔵本曰く其表也

而して此コシニヤリ本其表也の作ある大抵同し人なる事
 ハ注書するべき事と云ふん 初め狂歌三大入即蜀人唐永橋
 洲 朱樂其江を以てしと云ふ人の狂歌何出ぬ 平秩車心
 元の木阿弥 其其の鋒と云ふことありき こんらの人々一団休
 をりき 其其のモノ、唐の事、一いつ何の作らるやうに位の

ちつる黄毛の髪

こゝに大なるの取柄あるも死をせむる吾服も各一子
を續かざるもその中し大なるをとお績人とせんし
決す其の事なりお績等を連座の上より二子の風俗
を新ま一子先が事其胸のおを握るる刺身
危下りし「んを過び」を我欲す佐の一子のを握
すゝゝんを味えりき「んを一ぬとぬ也」と
遂に竹笠の穴にお流へたりし絵の如き

此世風俗歴々たるを一と以る作あるの風俗の
録み

コンニヤリ本の起原 物心ある侍の「おさか」

とある其書は「おさか」自序の事多田三太郎
かとあり或人の説く事多田三太郎とい
とも物心ある 平秩年凡う草野其名誤りし丹

波屋利兵衛」として此説也

又「おさか」の圖といふ者も「おさか」は「おさか」
也、いんちんめつりも大に物あり、コンニヤリ本中の名也
の「おさか」は「おさか」は「おさか」は「おさか」
書を浮田左江の異書に帖として蜀山人の随筆に師
方之は東江先生をい何處に記すか

去原大令と云ふものを作りしを又てん書つて唐経述
の句とる人「者」の下句とを合せては青柳の事を記し
果す事六帖といふ事と著しあつたこと物候あ
りと記す（平江と富山の以也）お此果す事二帖と實
曆七年壬子二月の跋り也、神儒佛の三家お定りて
記と歌とを合せて是るの事を記すと云ふ也 余
ハ此果す事六帖を以て唐経述の如し

同七年の夏雪月と云ふ事を出しき而して是書を
西原也和述孔子志子女即寫るなり、世書を大改
及此也と云ふ風俗之流也此れを記す也 元ハ

未だ江戸へ来る程の書を出て一ことろけんば揚子江を
ふくし 隆き客も東坡内湖の事と云ふ事志の事
主と本あり也 後あ和かを考へてさしう女即と
情み入行く遺書と梵説の記す一著者も二あり
あり一ともさしけん其及りのふも功也此書を志心の
一也

此後三聖を行つたことと云ふ事何れも名也 郭注孫子
を七つとて「唐通志」あり客を紀録夫を南都
ホありて似律分の記すあり又「ついでに記す三人連
通神講經三書也」あり「三書也」の助を孔子

七通うらう聖書を生てゆけ下の裏底の子路を使
ひて通ふ事しとてなる、そこへ天然大非 豊甘る
りて仕過しあし、死子の語る居候とさうして終ふ
そこへテうく肥えたる程か 全編のよきま、才子
又土音をおもき来り、そんならお揃い女郎宮り行
くとさるも物言ふな心也、各程かと程かとい
い酒言をさる也、れりまれ子くとい酒言をさる
「返りて化ける事と仲ノ所」といふ事、酒言多し
余も酒言中、中い傑心中の才一信、此を推入
いふ作者、唐来冬和の傳洋、いふ事、いふ事、思

早稲田大学図書館

あふも酒の通解、くく事と支那人の後商、非ざる
歎 本卷、くく事と十の事と、トウライと云い三の事を
「ガシナ」と云ふ、又「唐来冬和家の夜」を又も彼
が「唐来冬和」又「唐来冬和」のとき、唐来冬
いふ事、くく事と、くく事と、くく事と、くく事と、
あふも酒言の中、才一信、三友名也、さる事、唐来冬和の
名心」といふ事と、推入、くく事と、
又「唐来冬和」の才一の傑心中、唐来冬和、
と、酒言の通解、くく事と、唐来冬和、
唐来冬和、唐来冬和、唐来冬和、唐来冬和、

早稲田大学図書館

を掲げたり。京傳の後望也、而して此等の既心成と大持
酒後平黄喜楽のあはれをゆゑなき、黄喜楽中一の傑心
前掲の「江生艶祥傳」もいふ、黄喜楽中一の傑心
を掲げん、余と志三（手柄の岡打）を推さ、いとゆふ
酒後ちよる傑心さかの三喜楽も、酒後傑心作
者中の巨擘す、山東京傳ヲ推さ、いとゆふ、其若
通氣水濟傳、「通言徳離」等、何れも亦「其作
り」
京傳の作中、最も名作を「錦裏」といふ、これと志原
の書「其界」を掲げん、これと「其界」流あり、此の

二指圖石川雜記、北の十二の記とて、其取向を京
傳に終りし、京傳は、畫の部、丈を考へん、其作
り、此錦裏、とて、雅をいふ、其満是も、更とて、
返倉、人の流し、人の作し、いふ、いふ、此、
とて、雅をいふ、其満是も、更とて、
十二の記、をいふ、
京傳、此錦裏の裏、の、
酒後本、一切、
天水桶の中、之を投じ、
え、出版、寺、
潮、
江、
妻、

信の應永の事、其の流、事傳手鏡改めりの所を、りて行き流
又控くそ、一、継末を、るる、家の嬉しく、し、お、教、ん、る、る
、行、く、と、て、決、し、と、河、原、本、を、い、ま、依、り、し、と、思、ひ、い、
、事、傳、自、ら、傳、う、し、と、記、す、し、こ、の、い、ま、し、河、原、本、を、行、く、と、い、ふ、者、
、表、島、も、僅、々、に、お、顔、を、残、す、針、り、と、さ、う、ぬ、
、あ、ら、う、と、河、原、本、を、頼、り、出、し、て、さ、う、訓、せ、ん、又、言、を、い、
、傳、に、加、へ、と、出、せ、し、も、あ、ら、う、き、こ、え、ら、う、社、家、列、の、改、正、と、
、白、河、本、の、あ、の、ち、を、し、ま、さ、う、其、流、の、大、い、る、と、い、ふ、ま、い、ら、う、あ、い、
、又、一、面、も、い、ん、ば、梨、木、の、事、傳、を、教、し、係、せ、し、天、の、文、學、
、を、も、役、せ、し、人、ら、う、と、い、ふ、も、不、の、う、ら、う、と、い、ふ、

い、ま、白、河、氏、改、正、の、後、一、平、地、の、流、因、因、を、又、其、を、集、め、梨、木、
、を、い、ん、ら、う、き、此、の、北、北、の、十、二、の、を、あ、ら、う、と、記、す、し、
、の、ゆ、へ、に、あ、ら、う、と、い、ふ、西、に、鳥、の、羽、菜、之、を、い、ん、ら、う、と、
、と、り、け、ん、が、事、傳、の、あ、ら、う、と、い、ふ、ま、い、ら、う、と、い、ふ、
、お、下、の、つ、と、と、事、傳、い、い、け、し、と、い、ふ、ま、い、ら、う、と、い、ふ、
、又、其、の、事、傳、を、あ、ら、う、と、い、ふ、こ、の、事、傳、の、あ、ら、う、と、い、ふ、
、ハ、
、此、流、の、似、寄、り、を、流、の、一、つ、あ、ら、う、と、い、ふ、ま、い、ら、う、と、い、ふ、
、関、り、の、流、也、
、勝、寄、り、を、い、ん、ら、う、と、い、ふ、ま、い、ら、う、と、い、ふ、
、又、其、の、事、傳、を、あ、ら、う、と、い、ふ、こ、の、事、傳、の、あ、ら、う、と、い、ふ、

の襟子あると勝るまきこの異のこの語を呼ん不祓用、大の意
しつらき

平お仕仕の初め時おとをさんしゆ、右袂入りまんばを幅
を飾りか肩衣の紋と着物の紋と異るんを着けんハ
おあお外をひんし、我くと柳原をの右着を穿ひ
まんばまんば紋の帯くも理のいとをくけるを、おあ
謹厳の人まんば時々の跡紋を無む、時々のまんば
狭量の入ると笑いけり

この時、二者のおお和せむ、まゝお流の異るん、まゝあ
らう也、おあお外後、は浴衣、圍の記を時々の、はを以
て信託さん、が時々の、おあお外、の格、おの傍の、通るん、
在りし、が、異るの、時々の、おあお外、の、おあお外、の、
へき、おあ、ま、お、の、お、お、お、お、お、お、お、お、
おあお外、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
おあお外、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

和歌山大学図書印

和歌山大学図書印

和歌山大学図書印

和歌山大学図書印

和州府志卷之三

和州府志卷之三

閱覽室

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

和野大學生圖書館

位

明治三十七年
六月起筆

春城閑人